



我が家の仏壇には、先祖代々の位牌いはいと父と母の位牌もある。祖母の旅籠はきやの仏壇は、あの世へ通じているようで怖かった。「ソボ、シス」の電報は東京の4畳半の下宿で受け取った。まだ、演劇を修業している最中で帰る旅費がなかった。布団をかぶっ

て一人で泣いた。

よく通夜の席や葬式でいない人の悪口をいう人がいるが、あれはいる人よりはいい人の方が辛いのではないか。父も隠岐の島の祖父の葬式にも、祖母の葬式にも帰らなかった。昼から座敷に布団を敷き、祖父からも

しは仲間と田んぼで相撲を取っていた。役所からの帰り道の父が、笑いながら田んぼへやって来た。そして、腕まくりをして「ちったあ強うなつたとか」とか

父とは、2人で映画を見に行った経験が一度だけある。加山雄三が主演の「大学の若大将」である。父は、この映画ならば安全と考えたのかもしれない。加山雄三は銀座にあった老舗のすき焼き屋の、なんの不自由もない一人息子である。ウクレ

おはあちゃんから「おまえは商業学校出だから」といつも怒られている。父の有島一郎も「商業学校出のどこがいけないのですか」とむきになって突っ掛かる。そうだ、あの店をあそこまでにしたのは父の才覚である。どこが悪い。

## 力関係逆転した日

らった尺八を枕元に置いて布団をかぶっていた。帰る時間も旅費ももったいなかったはずである。まだ、そんな時代であった。父の心中、察するに余りある。

父と子の力関係が逆転する日がある。わたしの場合、その日は早かった。中学時代である。わた

を掛けると、すぐに四つに組んで父のベルトを取ると外掛けを決めた。父は油断してなめていた。父は宙に1回転して背中から落ちた。あの日がわたしと父の力関係が逆転した日であった。あの日から、なんとなく他人

レで歌を歌い、働いているのか遊んでいるのかかわらないようなアルバイトを河口湖かなんかでしている。けんかも強い。なにかあると大学の水泳部の仲間

行儀の関係になってしまった。質である。加山雄三を応援する

の力関係が逆転した日であった。あの日から、なんとなく他人

に店の肉を持ち出して豪快におごる。父は商業学校出の職人気

なるほど、神を信じないのが神か。西部劇の悪党のせりふにならあるかもしれない。